

海鳥圖

海鳥

海鳥

海鳥

海鳥

海鳥

海鳥



九七編上



種彦作
國貞画

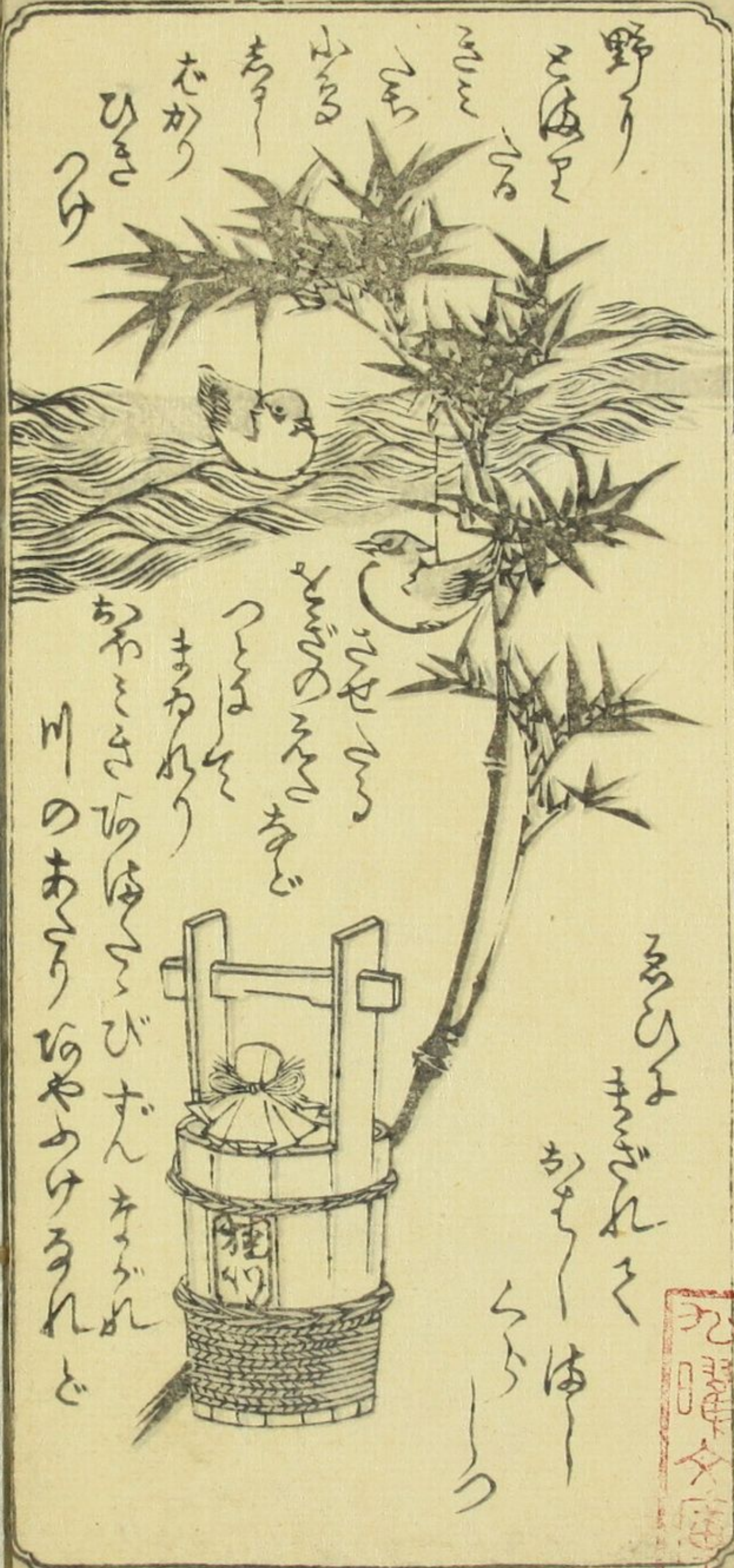


九七編上

種彦作諸国物から大和の巻
残編此節出来賣いふてい

侘装

日令丸 種ひさし 四身志く
しんせき じんせき じんせき じんせき
しんせき

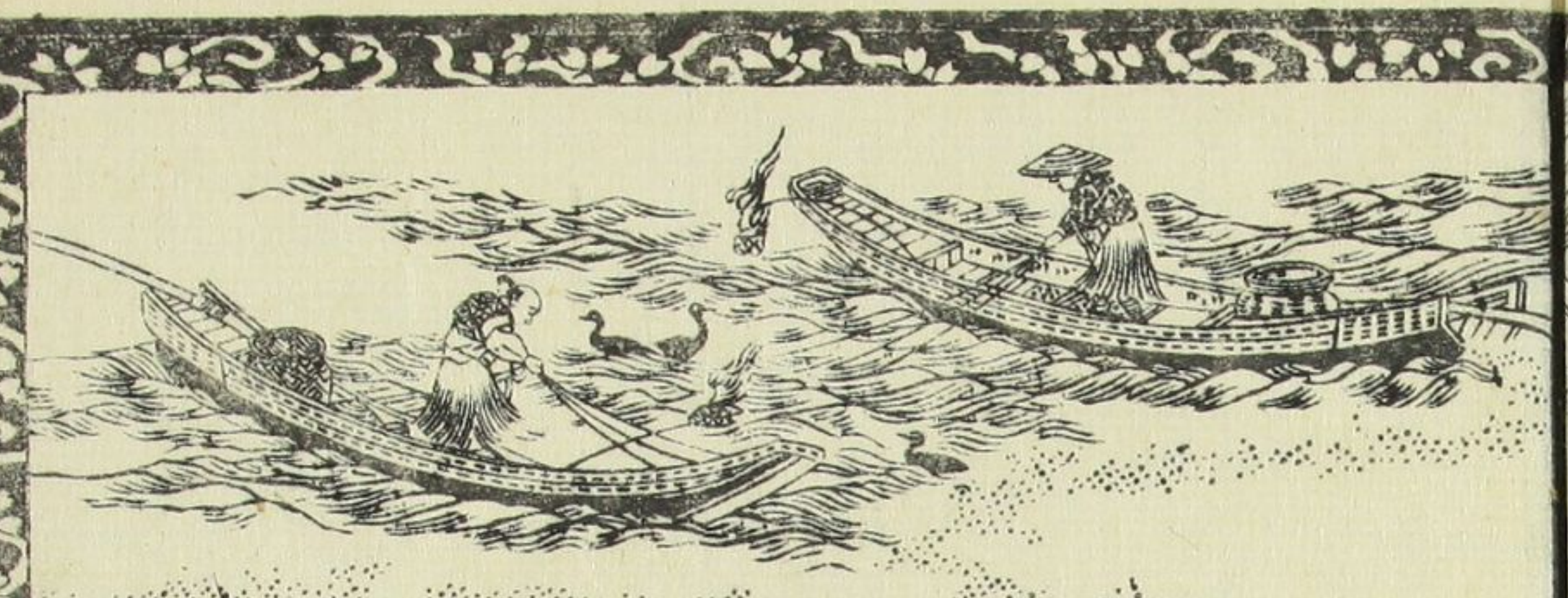


連歌名づき宗椿の源氏を愛するのあまり讀み不足むとて
書寫する事數十部遂に朝顔の巻を書きつと汲りつと
それと是の事かそれと原素をうき草雙子のまきまき長く
續き朝顔のあろよ至らばあろよあろよと其の事と
うきまきまき阿吉木の寓ふ終びあきか既に彼巻あきあり
せんまきあきまき松風の松ふかき朝顔は似氣をなれどもその發端を
あきまきあきまき薄雲とうち載て齋院の典形とうりえとその
仕業あり如くまきまき後まきまき言葉の回島がうりえとそもく夕歌
朝顔の名も及対まきまきあきまき又齊くまき遠輪廻虫似これども
うの黄昏の光氏を思ふのあきまき無常とちり菊咲ハ又恋とうけむ
釋となるの句作りの柳のかちりて後まきまき記さん

天保戊戌條風

柳亭種彦

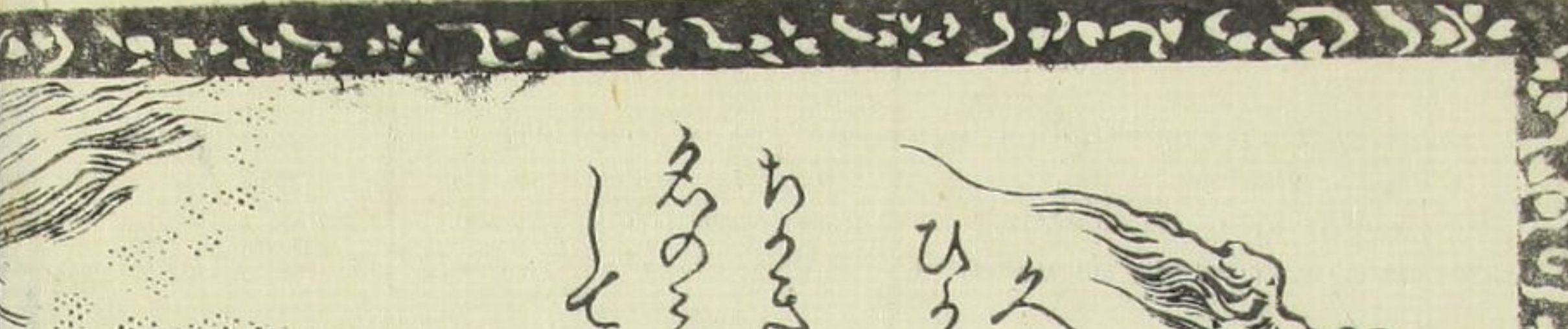




すく
えつらふ
のまげかゝるる



うき
雲ふ
まき
まひり
おの
む
み
萩



あつらひ
たれぬ
ま

ひ
く
あ
あ
あ
あ
あ



あ
き
の
後
室
空
衣

る月あかりね
 りりのたままの
 ちのきさつひ
 さびきさつひ
 先氏いありい
 せりの人の之り
 れもささくね
 がちふありひつ
 けつ
 へまをまひつ
 せめてその多
 よぶあまさ
 るめんとひ
 えれめくあ
 ちあまき
 けとくれ
 るつあま
 うこよま
 いかれあり
 つるあ
 ひ
 どの



せんまらと
 きけんつ
 ありり
 どのの今
 まりら
 むれは先氏
 の
 まりら
 まりら

せんまらと
 きけんつ
 ありり
 どのの今
 まりら
 むれは先氏
 の
 まりら
 まりら



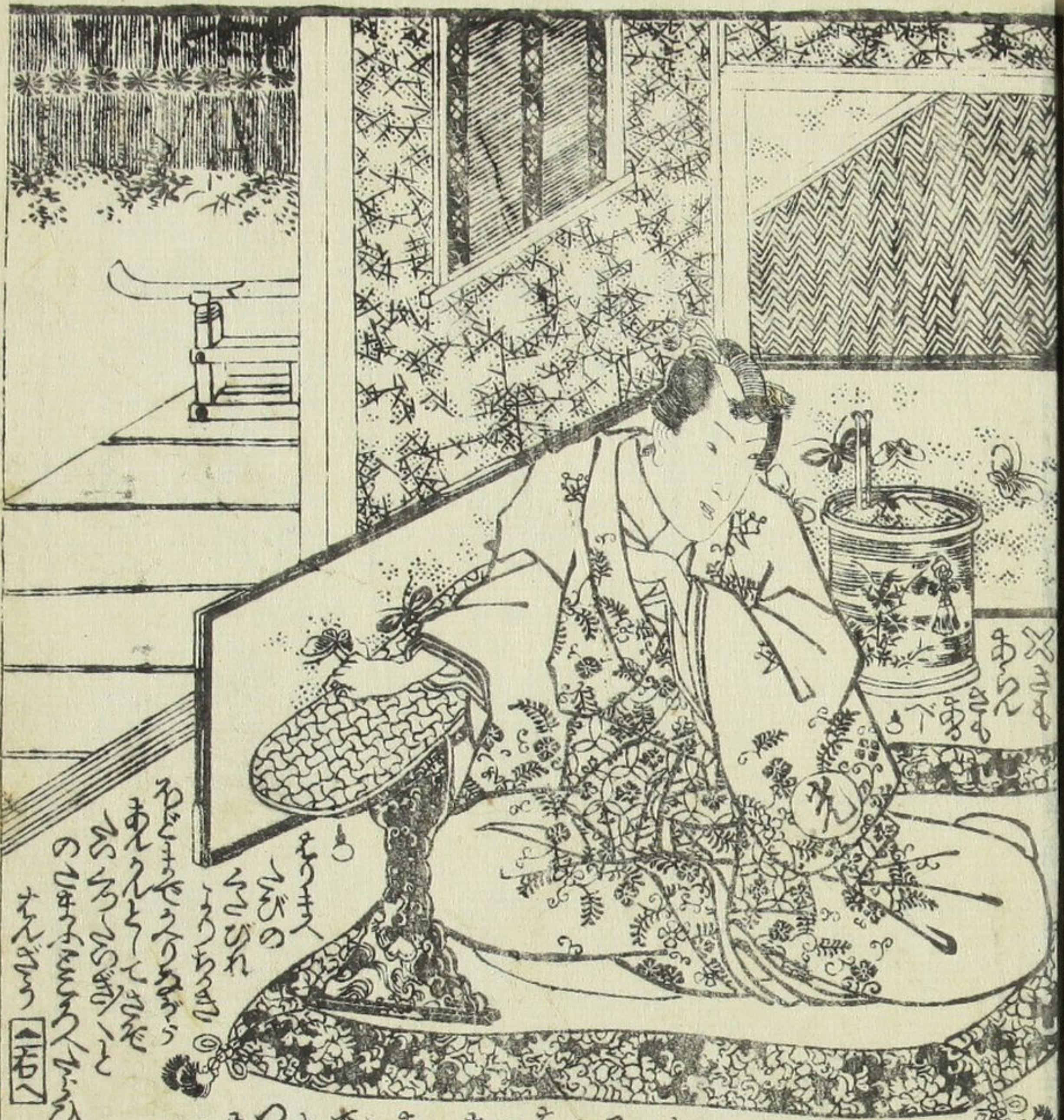
ちうまは
 これへと
 ちうまは
 これへと
 ちうまは
 これへと



せんまらと
 きけんつ
 ありり
 どのの今
 まりら
 むれは先氏
 の
 まりら
 まりら

月すま
 の初りつ
 うち
 やあ
 まり
 宗入
 りん
 宗入





あつちのついでにうらな
 いたふらふらふらふらふら
 あつちのついでにうらな
 いたふらふらふらふらふら
 あつちのついでにうらな
 いたふらふらふらふらふら

源氏十本鏡



あつちのついでにうらな
 いたふらふらふらふらふら
 あつちのついでにうらな
 いたふらふらふらふらふら

あつちのついでにうらな
 いたふらふらふらふらふら
 あつちのついでにうらな
 いたふらふらふらふらふら

あつちのついでにうらな
 いたふらふらふらふらふら
 あつちのついでにうらな
 いたふらふらふらふらふら

源氏十本鏡

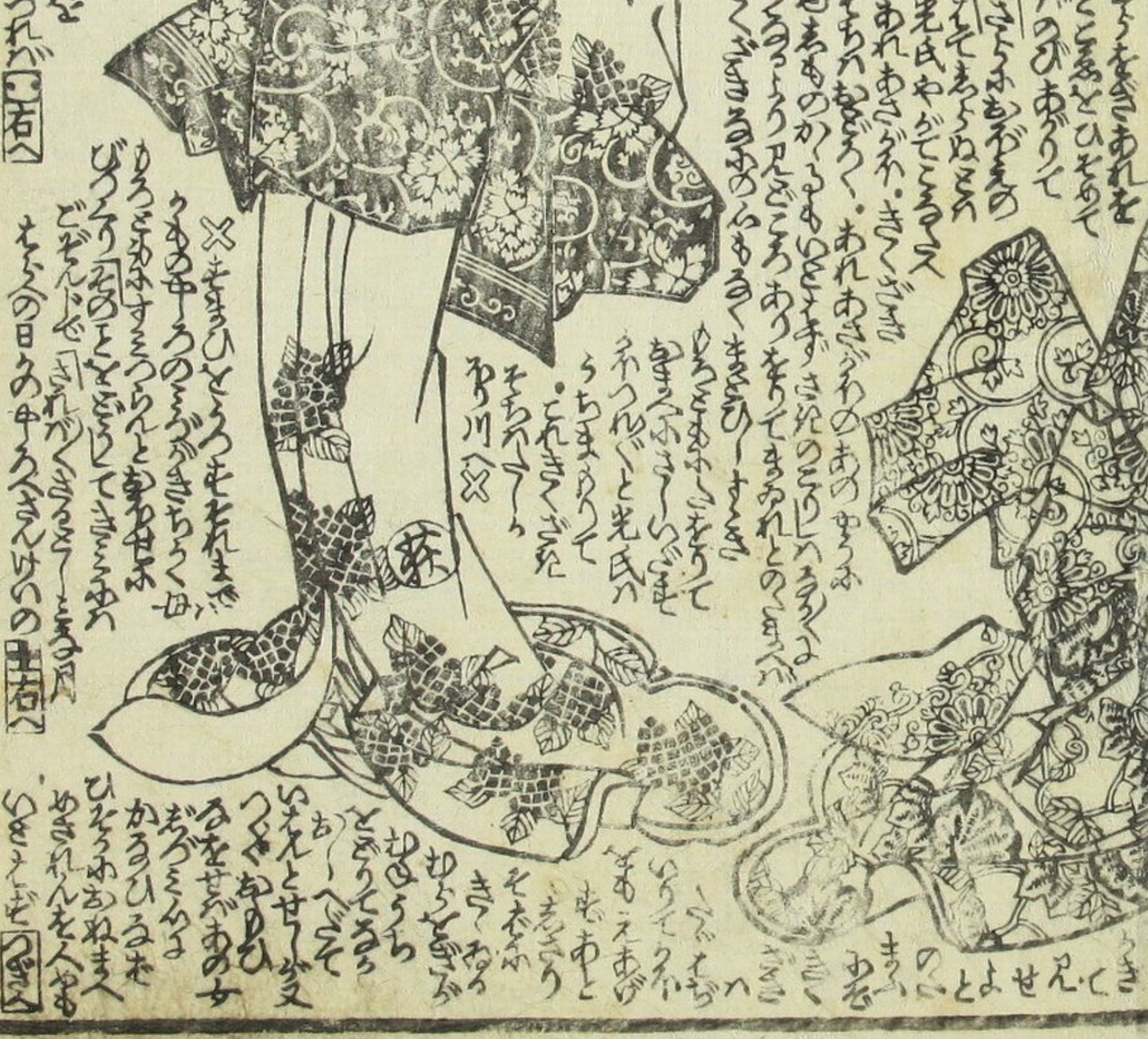
Handwritten text in the top right section of the right page, likely a chapter heading or introductory text.

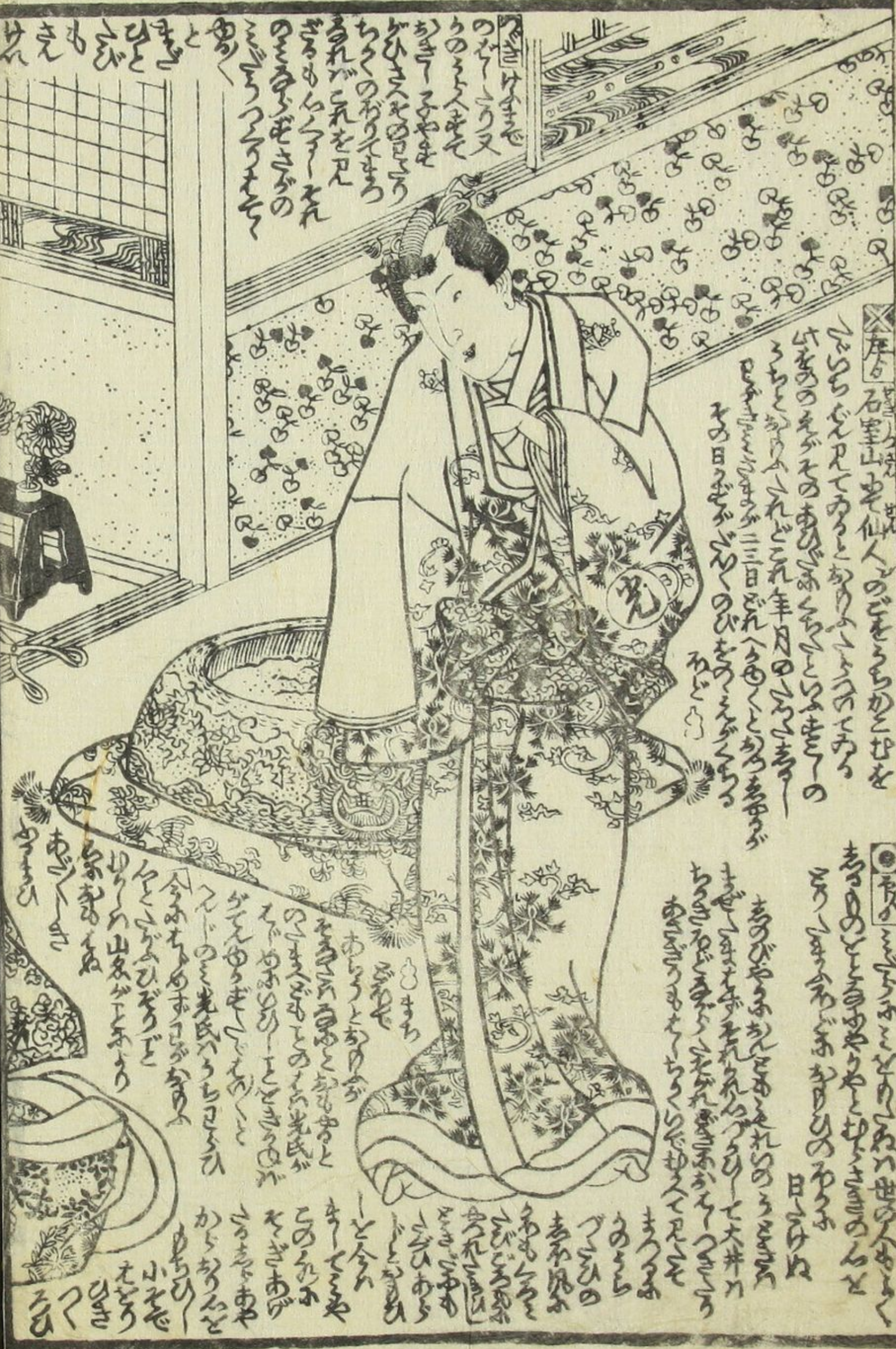
Handwritten text in the bottom right section of the right page, continuing the narrative.



Handwritten text in the top left section of the left page.

Handwritten text in the bottom left section of the left page.





あはれも
と
あはれも
と
あはれも
と

あはれも
と
あはれも
と
あはれも
と

あはれも
と
あはれも
と
あはれも
と

あはれも
と
あはれも
と
あはれも
と

あはれも
と
あはれも
と
あはれも
と



あはれも
と
あはれも
と
あはれも
と

あはれも
と
あはれも
と
あはれも
と

あはれも
と
あはれも
と
あはれも
と

Handwritten text in the top and bottom sections of the right page, written in a cursive style.



Handwritten text in the top and bottom sections of the left page, written in a cursive style.





Handwritten text in the upper right corner of the illustration, likely a transcription of dialogue or a commentary.

Handwritten text in the lower right corner of the illustration, continuing the transcription or commentary.

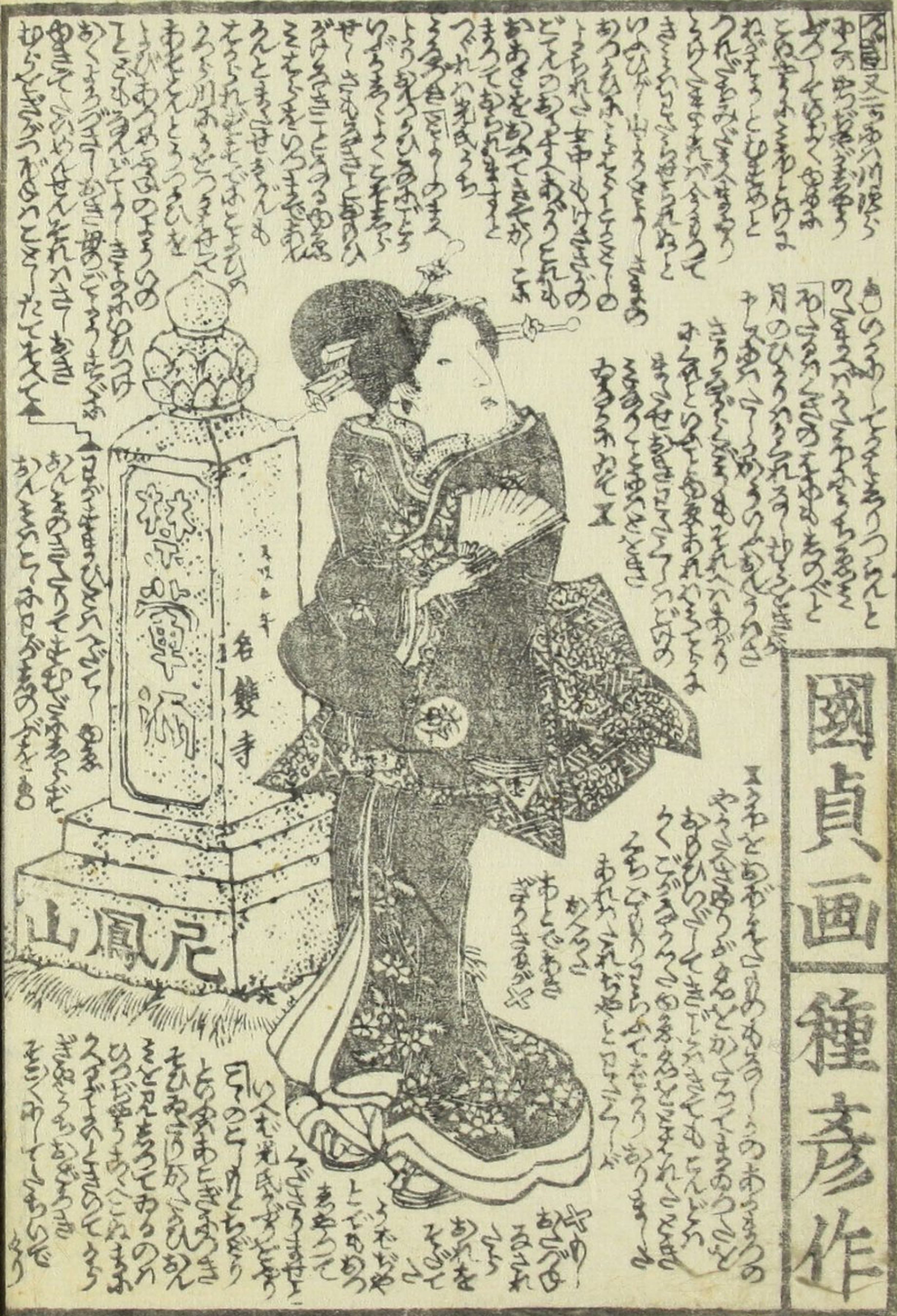
Handwritten text in the lower left corner of the illustration, possibly a title or a specific note.

Handwritten text in the upper left corner of the page, above the illustration.

Handwritten text in the middle left section of the page, between the two illustrations.

Handwritten text in the lower left section of the page, below the illustration.

國貞画種彦作



他社今方州集全二冊

他社最書集全二冊

他社今四秋仙全冊

他社今人相合集全四冊

他社今人叢句集全二冊 素庵年早春虫板

書肆

江戸通油町 仙鶴堂 轉居在吉富門藏

東都若木書院

國貞の書は、その筆致の清麗さと、文字の整然とした美しさで、後世に大きな影響を与えた。特にこの『今方州集』は、その代表作の一つとして知られている。

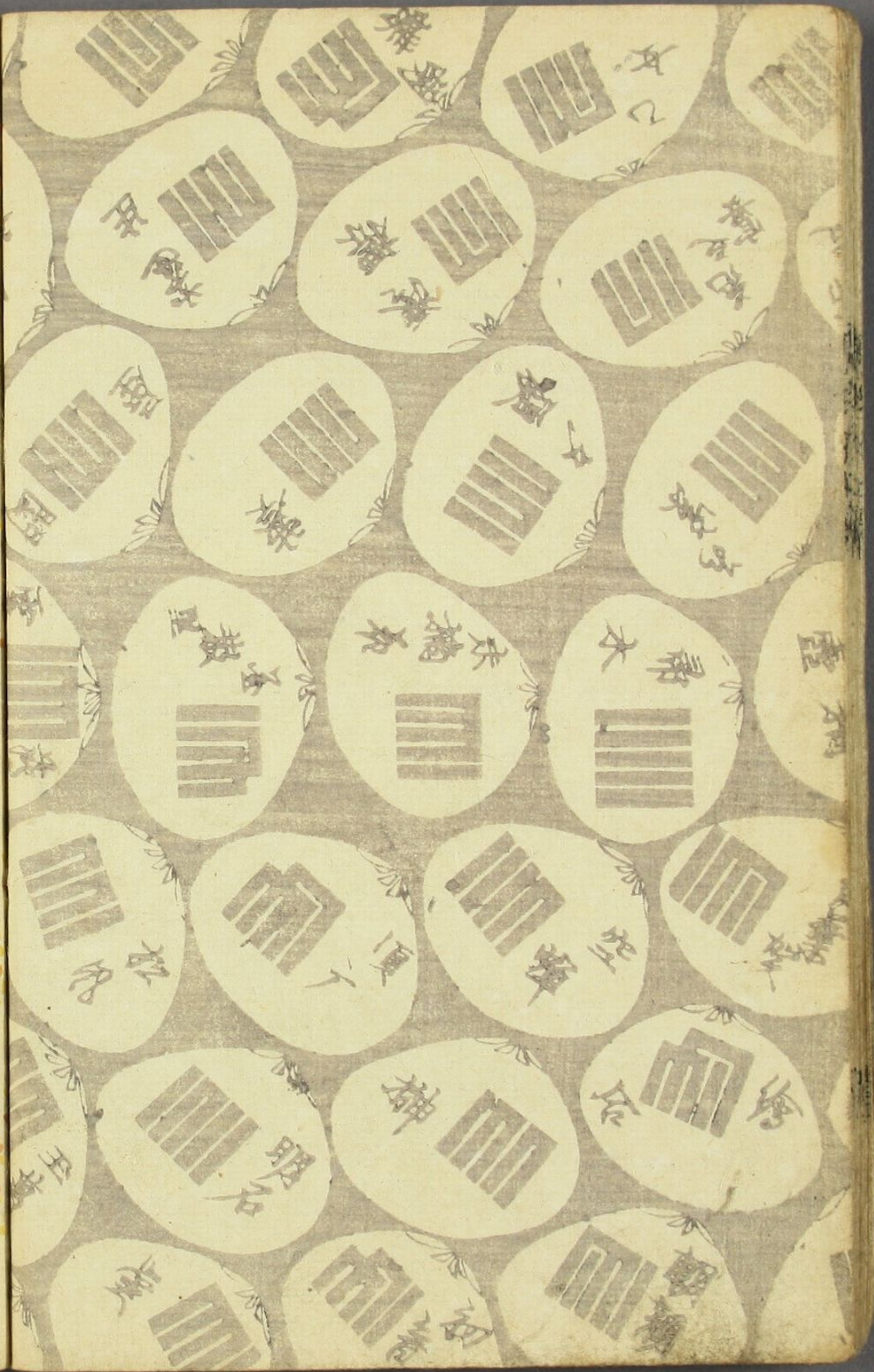
『最書集』は、国貞の書道技術の大成を収めた重要な作品集である。その筆力と構図の巧みさが、この時代の書道界をリードした。

『今四秋仙』は、季節感あふれる詩歌を収めた一冊で、国貞の繊細な筆遣いが、文字の美しさを引き立てている。

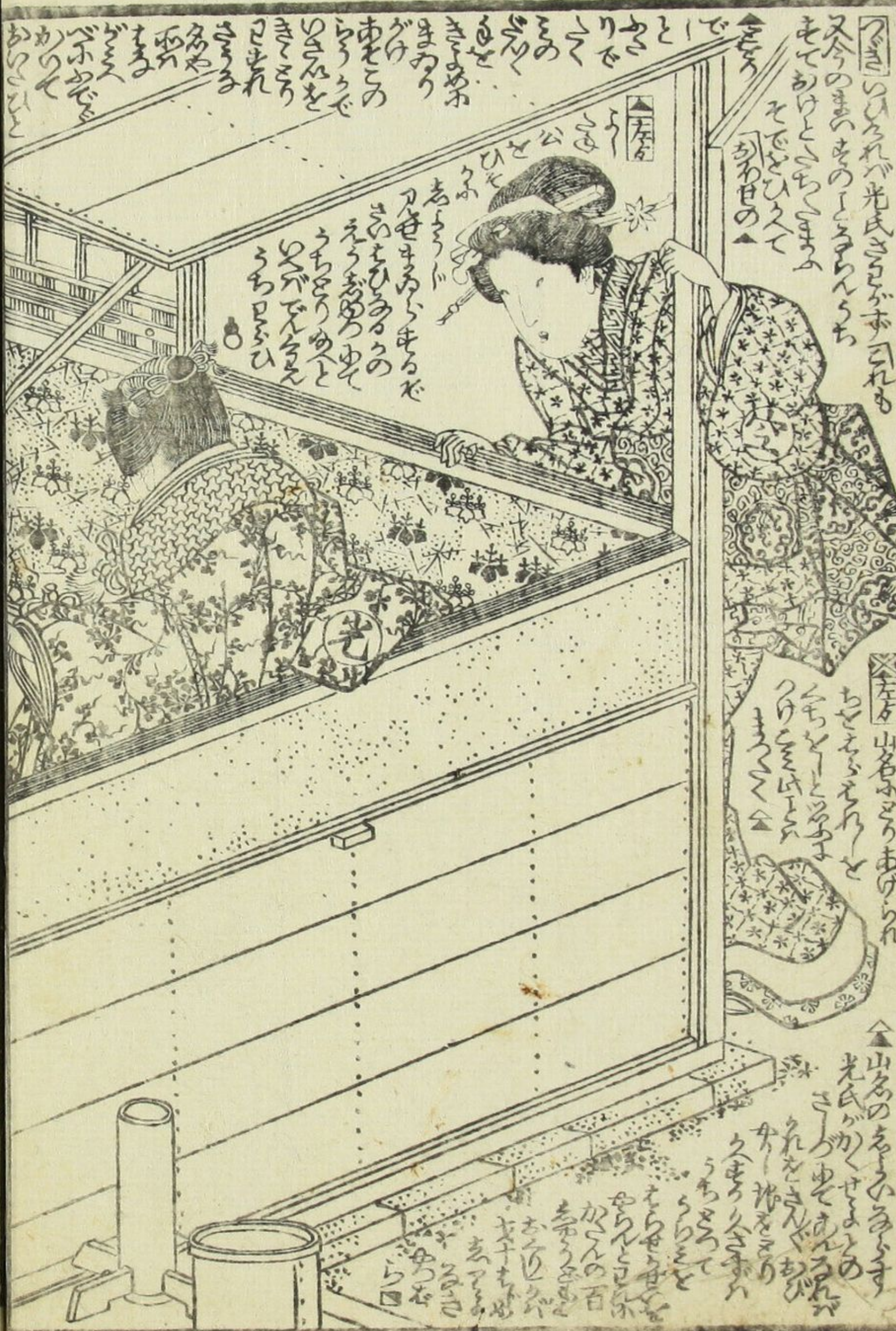
『今人相合集』は、人相に関する詩歌を集めたもので、国貞の書道が、人々の心を惹きつける力を持っていることがよくわかる。

『今人叢句集』は、俳句や和歌の集りであり、国貞の書道が、自然の美しさを表現する上で果たした役割が大きい。

江戸通油町の仙鶴堂は、この書物の主要な流通先であり、多くの読者にこの書道の名作を届けた。



光氏をいふれ光氏さうぶすれも
又今のまのまのいささち
まてあけとちいささち
そでとひえて
刻の目



山名ふさりあがりれ
ちとちとちと
つりつりつり
まてて

山名のまのまの
光氏かかきせよの
さうぶあはるる
れをさんやあひ
かきつり
うまうま
うらとて
をらとて
かんの百
まてて
おひ
まてて
まてて

光氏をいふれ
又今のまのまの
まてあけとち
そでとひえて
刻の目

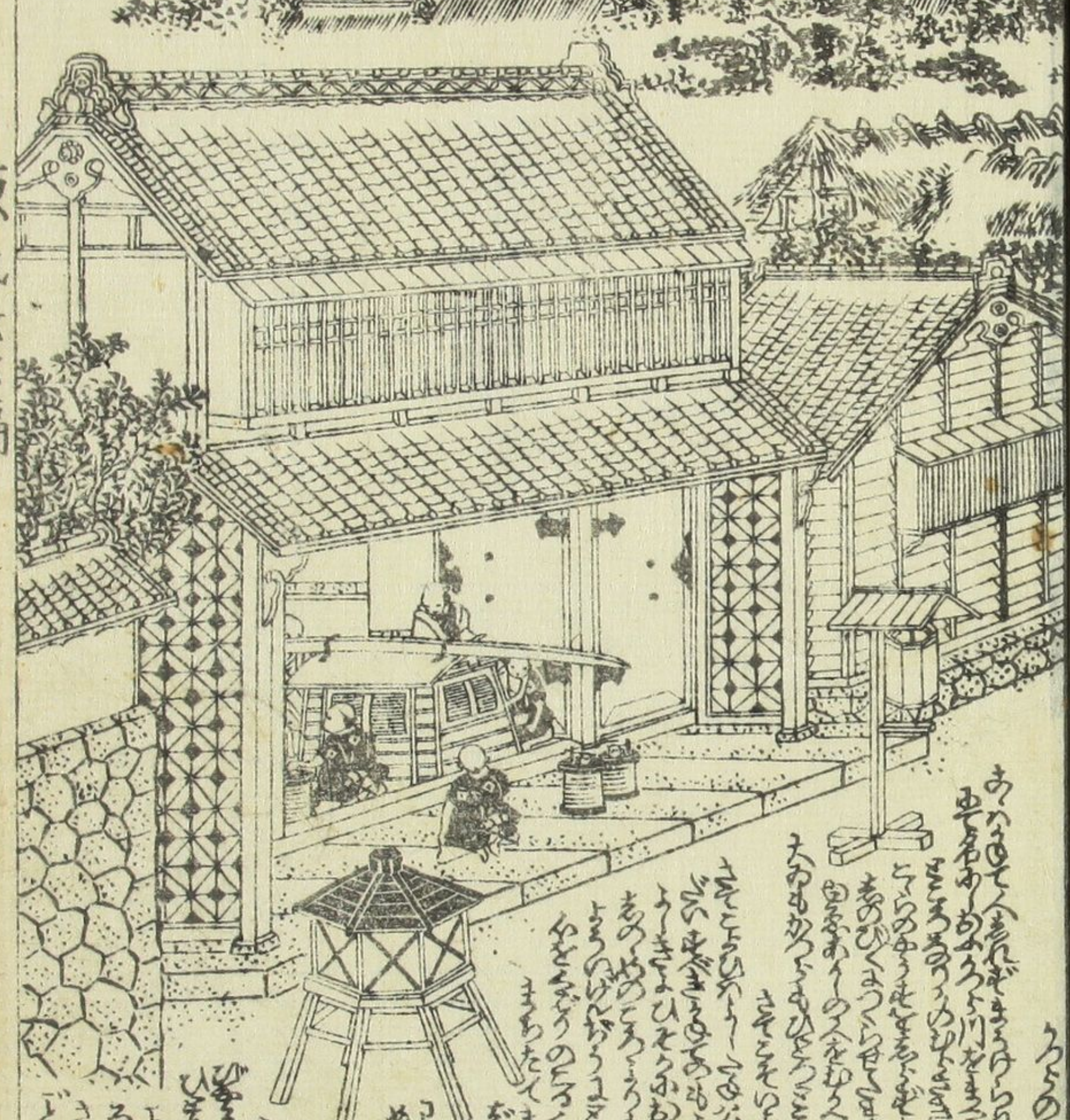


光氏をいふれ
又今のまのまの
まてあけとち
そでとひえて
刻の目

光氏をいふれ
又今のまのまの
まてあけとち
そでとひえて
刻の目

光氏をいふれ
又今のまのまの
まてあけとち
そでとひえて
刻の目

桂の院の光氏別館
 北の院の光氏別館
 桂の院の光氏別館
 北の院の光氏別館

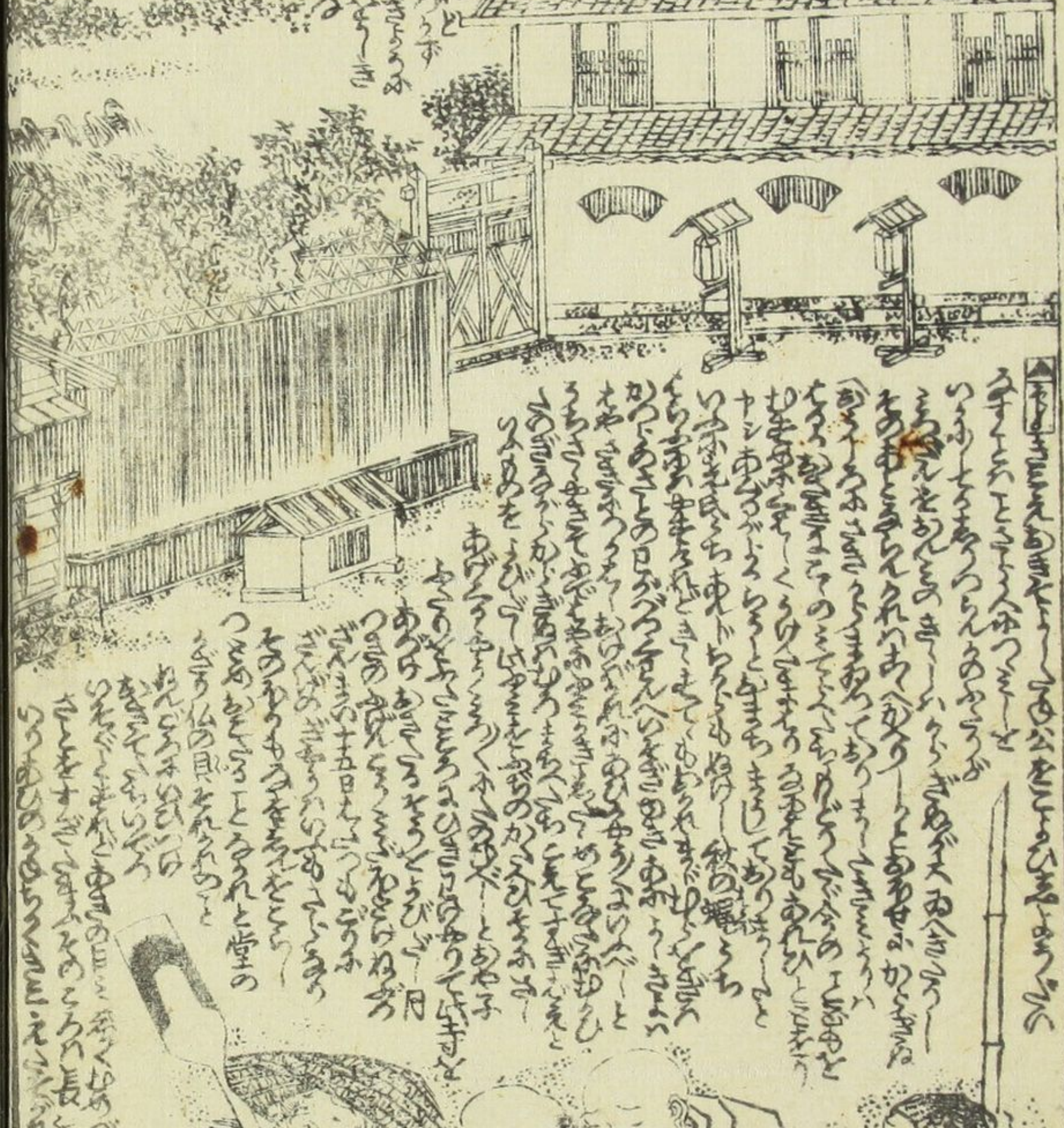


光氏別館の北の院
 桂の院の光氏別館
 北の院の光氏別館
 桂の院の光氏別館
 北の院の光氏別館

源氏七編

一五

源氏七編
 光氏別館の北の院
 桂の院の光氏別館
 北の院の光氏別館
 桂の院の光氏別館



源氏七編
 光氏別館の北の院
 桂の院の光氏別館
 北の院の光氏別館
 桂の院の光氏別館

源氏七編

一五



Vertical columns of Japanese text on the left side of the illustration, likely dialogue or narrative text.

南徳三町三丁目
坂本氏
仙女香
羨玄香
右に
仕
の程
本氏



Vertical columns of Japanese text on the left side of the illustration, likely dialogue or narrative text.

Vertical columns of Japanese text on the right side of the illustration, likely dialogue or narrative text.



原氏七編



源氏七編

鳥居



